

周作人における『旧約聖書』

——「エレミヤの哀歌」から「ソロモンの雅歌」へ

根岸宗一郎

論文摘要：周作人在日本留学之时发表了一篇文学论《哀弦篇》，此篇里他论及《旧约圣书》，而中心说明的就是《旧约圣书》所收录的《耶利米哀歌》。之中他将耶利米看做了一个咏〈哀音〉的诗人，而以《耶利米哀歌》认为希伯来之国民文学。十多年之后，周作人发表了《圣书与中国文学》，也论及了《旧约圣书》，反而他中心考察的对象不是《耶利米哀歌》，而是《旧约圣书》所收录的《所罗门雅歌》。周作人边参照 Moore “The literature of the Old Testament”，将《所罗门雅歌》认为希伯来的民间歌谣之一。本稿考察了周作人关注的《旧约圣书》中之二种诗歌的意义所在。

关键词：周作人；《哀弦篇》；《旧约圣书》；《圣书与中国文学》；《耶利米哀歌》；《所罗门雅歌》

周作人は、日本に留学中、立教大学で古典ギリシア語を学び、また立教大学と関係のあった三一学院で『新約聖書』をギリシア語原典で読む学習もしていた。ギリシア語学習は、古代ギリシア文学の翻訳を生涯続けていく契機となった。一方で、ギリシア語を学んだ目的は、『新約聖書』の翻訳するためだったと、後に周作人は回想している¹。日本で西洋文化を吸収しようとしていた当時の周作人は、西洋文化の源泉がギリシアとヘブライの二つにあることを理解した

上で、古代ギリシア文学とともに、『聖書』に強い関心を持っていたと言える²。本稿では、周作人が古代ヘブライ文学である『旧約聖書』を、日本留学中から五四時期にかけてどのように論じているかを検討する。そして、周作人が日本留学中に形成した文学観との関係に留意し、『旧約聖書』についての論じ方の特徴を明らかにすることを試みる。周作人が最初に本格的に『旧約聖書』を取り上げて論じたのは、日本留学中の1908年12月に発表した文学論「哀絃篇」³であるので、先ず「哀絃篇」における『旧約聖書』に関する叙述から見ていきたい。

1、「哀絃篇」における「エレミヤの哀歌」

1908年、周作人は「論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失」⁴（以下、「論文章之意義」と略す。）と「哀絃篇」という二篇の文学論を発表する。このうち「哀絃篇」の第一節と最終節において『旧約聖書』が取り上げられている。「哀絃篇」において周作人は、外国文学の紹介により中国人を感化することが可能であるということを論じていくが、冒頭は次のように始まる。

中国の世界の色は薄暗くなって久しい。民の徳は散り散りになり、質（肉体：筆者）はやつれ、精神は損なわれ、古の輝きはなく、新しい声が現れる兆しもない。⁵

1 「『希臘擬曲』序」（1934年）参照。

2 周作人が『聖書』に初めて言及したのは、日本留学中の1907年、「女禍伝」においてであり、『旧約聖書』の『創世記』からアダムとイブのエピソードを紹介している。周作人と『聖書』との関係については、顧鈞〈周作人与《圣书》文学〉（《苏州科技学院学报》社会科学版第27卷第2期，2010年3月15日）を参照。

3 『河南』第9期（1908年12月）所載。

4 『河南』第4期、第5期（1908年5月、6月）所載。

5 华土物色之黯淡也久矣。民德离散，质悴神亏，旧泽弗存，新声绝联。（《周作人散文全集》第一卷、广西师范大学出版社，2009年、P128）

このように中国の文化界、精神世界が衰退して復興の兆しが見られないことを述べた上で、『旧約聖書』の「エレミヤの哀歌」を挙げて次のように述べる。

エルサレムが滅び、エレミヤはこのために哀歌を詠った。優れた響きは後世に流れ、今に至るまで既に二千四百年、ユダヤの昔の場所に行った人は、シオンの河畔を過ぎて、古跡を訪れて往時を偲び、徘徊して去るに忍びなく、聖地の荘厳さに跪いて額づくことはなくとも、イスラエルの子孫を弔うのである。今この詩歌を読むと、なお悲しい響きを留めており、なんと物寂しいことか。異なる世界にも同じ感情があるではないか。⁶

『旧約聖書』「エレミヤの哀歌」が外国の作品でありながら、そこに表現されている亡国の悲哀という感情が、中国人の感情にも共通のものであることを指摘している。周作人は、外国文学が中国人を感化し得ることの論証を次の第二節で行っていくが、西洋文学が中国人にも感化力をもつことの論拠として、古代ギリシア文学とともに西洋文学の源流の一つである『旧約聖書』を取り上げたとも考えられる。つづけて周作人は、中国が亡国の危機にあるという現状を目の前にして、心に浮かぶのは喜びの感情ではなく「悲哀」の感情であること、その「悲哀」の感情を表現した文学がいかに重要であるかについて次のように述べる。

落ちぶれた民が、身の上が既に下り坂となって、慌てて四方を見まわし、寂寞を目の前にして、正にこの時何を以て喜ぶことがあろうか。(中略)
滅びた国を再興しようとする者は、道は喜ぶことをやめて望みを絶つこと

6 故耶路撒冷隳矣，耶利米为之哀歌，逸响流于后世，及今已二千四百载。人有游犹太故区者，过什翁川畔，凭吊古迹，犹徘徊不忍去，不膜拜圣地之庄严，而为以色列子孙吊也。即今见之诗歌，亦往往留哀响，岂非萧条之感，异世有同情哉。(同上 P129)

にある。悲哀の声の作品に絶望の感情を寄せることで、未来の望みはまたここから生まれるのである。末世には哀音があるが、それは正に人の心がまだ寂しくなっていない証拠である。国がみじめな状況になってもまだ物寂しいまでには至っていないのである。(中略) 蓋し、人の世は常に楽しみは少なく、悲しが多い。楽しみは短く悲しみは長い。故に、天下の心の声は多く愁嘆の節を詠い、人情を激しく刺して、素早く感得させるのである。⁷

亡国の危機に瀕した状況でも、「悲哀」の感情を表現した「哀音」の文学が生まれることが、国家の再興への希望となるとした上で、周作人は次のように続けている。

私は中国全土に耳を傾け、先の世が残した声を聴こうとしたが、ほとんど聞くことができなかった。しかし、大海万里の彼方にはなお哀音があり、はるか遠くで唱和している。その声は民族により異なるが、物寂しく悲しみ恨まないものはない。絶望の中に激励し奮起させる音があるのである。(中略) (中国の：筆者) 世に久しく悲哀を聞かない。そこで、私はいま (外国の作品の：筆者) 概略を収録し、少しばかり書き留めて国の人々に告げよう。⁸

当時の中国には悲哀を表現した文学がないため、悲哀を表現した外国文学の

7 若夫中落之民，身世既凌夷矣，仓皇四顾，寂漠当前，则此时也，将何以为欢乎？（中略）欲继绝国者，道在遏乐而绝希，悲哀之声作，予以寄其绝望之情，未来之望，亦造困于是。末世有哀音焉，正所以征人心之未寂，国虽惨淡而未至于萧条者也。（中略）盖在人事，恒乐少而悲多，乐暂而悲久也。是故天下心声，多作愁叹之节，而激刺人情，感应尤疾。（同上 P129-130）

8 吾倾耳九州，欲一聆先世之遗声，乃鲜有得。而瀛海万里之外，犹有哀音，遥邈相和。虽其为声各以民殊，然莫不苍凉哀怨，绝望之中有激扬发越之音在焉。（中略）世久不闻哀悲矣，吾今乃将收其大概，少为编志，以告国人。（同上 P131）

作品を紹介しようと周作人は考えたのである。そして、『旧約聖書』の中でも亡国の悲哀を詠った「エレミヤの哀歌」こそ、亡国の危機に瀕していた中国の状況にふさわしいものとして選択されていると言えよう。

周作人は次の第二節で、フランスの文学者テーヌが『イギリス文学史』⁹で論じた、ある国のある時代の文学が「人種」「環境」「時代」の三要素から形成されるという説を紹介する。ある民族がもともと持つ特徴に、置かれた環境による変化が加わり、さらに時間の経過による蓄積が加わった結果、その民族の一時代の文学が生じるというものである。さらにイギリスの文学者パンコーストの文学論¹⁰に基づいて、人間の感情は古今東西に共通性があるので、その感情を表現した文学には古今東西に普遍性があることを論証する¹¹。次の第三節から外国文学の紹介を行っていき、第三節と第四節では、ポーランドが分割によって国家としては滅亡したが、ミッケヴィッチら詩人たちがポーランドの「国民精神」を詩に詠いつづけており、ポーランドの国民は滅びていないと述べる。第五節では、ウクライナの詩人たちを取り上げ、ロシアに支配されているウクライナの悲哀を詠った作品を紹介する。さらにはやはり他国に支配されているポーランド、ブルガリア、セルビア、クロアチアといったスラブ系の民族の詩人たちを紹介している。そして、最終節の第六節でヘブライの文学を取り上げて紹介するが、その前半が『旧約聖書』の紹介である。第六節の冒頭は次のように始まる。

ヘブライ人は宗教の国民である。『旧約聖書』三十六篇は、実際、思想文章に託されたものは、いずれも莊嚴で奥深く、古風な雰囲気は人を感動させる。¹²

9 Hippolyte Taine "A Histoire de la littérature anglaise" (1863-64 年)

10 Henry S. Pancoast "An introduction to English literature" (1896 年)

11 詳細は、拙稿「周作人におけるハント、テーヌの受容と文学観の形成」(『日本中国学会報』第49集、1997年)参照。

ヘブライ人が宗教的民族であり、その精華が『旧約聖書』であるとするが、周作人は「しかしまた文章の情趣がソロモンの『雅歌』のように艶やかに美しいのは世に稀である¹³」とつづける。『旧約聖書』には荘嚴な要素だけでなく、恋愛詩「ソロモンの雅歌」のように艶やかで美しい作品もあると指摘しているのである。つづけて、周作人は、イスラエルの滅亡と「エレミヤの哀歌」の成立を次のように述べる。

イスラエルが衰微してバビロニアに敗れ、エルサレムは既に征服されて、城門は破壊され、子女や玉や絹織物は国の敵に奪い去られた。エレミヤは国にあってこれを予見し、預言書を書いて民に警告したが、ついに救うことができなかった。ただ『哀歌』七首¹⁴でその悲しみを詠っている。¹⁵

そして、第一歌の冒頭七節を引用する。これが周作人にとって『旧約聖書』最初の翻訳でもある。第七節からの引用は次の通り。

エルサレムが困難にぶつかったとき、昔日の栄光の様子に思いをはせる。今、民は皆囚われの身となり、救える者もない。敵は皆喜び笑い、エルサレムの衰亡を嘲る。¹⁶

12 希伯来人，宗教之国民也。《旧约》三十六篇，实其思想文章之所寄，盖莫不庄严玄妙，古气动人，（《周作人散文全集》第一卷 P146）

13 然文情艳美如所罗门《雅歌》者，世亦仅矣。（同上 P146）

14 『周作人散文全集』第一卷 146 頁では、『河南』誌上で「六章」となっていたのを「七章」と修正したと注で記しているが、「エレミヤの哀歌」は五首しか残っていない。

15 逮以色列式微，为巴比伦人所克，耶路撒冷既下，城阙毁败，子女玉帛，虏于国仇，耶利米以国中先知，作预言书警告其民，而终弗能救，唯有《哀歌》七章，抒其悲感而已。（《周作人散文全集》第一卷 P146）

周作人は続けて「エレミヤ書」第二十五から、預言者エレミヤが神に代わって告げたバビロニアによるエルサレム征服の予言を引用する。

我はその歡樂の声をことごとく消し去り、新郎新婦の喜びの声も皆絶えよう。ひき臼の音もなく、ともし火の光も土に落とされて消えよう。国中が荒涼空虚となり、バビロニアに七十年間支配されよう。¹⁷

予言通り七十年後、バビロニアがペルシアに滅ぼされたことでエルサレムは復興するが、後にローマ帝国に征服されて再びエルサレムが荒廃するところまで周作人は述べる。そして、「ああ、文明のあった古い国は、古の栄光はすぐには途絶えないが、いったん零落すると、救うことはできない。¹⁸」と慨嘆する。つづけて、周作人は、古代ギリシア人が、ギリシアの国が滅びた後、海賊に身をやつしたことをパイロンが非難しなかったように、私たちもユダヤ人が国が滅びて世界中に離散したことを笑うことはできないと述べる。そして、外国文学の紹介により中国人を感化したいという願いを次のように述べる。

今、この一篇に他国の文学の精華を少しだが集め、我が国に伝えることで、欠けているものを補うことはとてもできないが、せめて海外にはまだ哀音を奏でる絃があることを知ってもらうことを願う。中国の寂寞には勝るだろう。¹⁹

16 耶路撒冷当患难时，忆昔日光荣之状。今也民皆为俘，无人能救。敌皆喜笑，嘲耶路撒冷之衰亡也。（同上 P146-147）

17 吾将尽去其欢乐之声，新郎新妇，皆绝愉音。且无磨声烛光见于下土，将使全国荒凉空虚，受制于巴比伦者七十年。（同上 P147）

18 呜呼！文明古国，旧泽宜不遽斩，一旦零落，乃不可振。（同上 P147）

19 今于此篇，少集他国文华，进之吾土，岂曰有补，特希知海外犹有哀弦，不如华土之寂寞耳。（同上 P149）

周作人は半年前に「論文章之意義」を發表し、「文学は人生思想の表現である。」²⁰、「文学は国民精神の託されたものである。」²¹と文学の定義を論じていた。周作人は、国や民族の「精神」を表現する「国民文学」を中国に誕生させることを意図していたのであり、ヘブライの「国民精神」の現れである「国民文学」としての『旧約聖書』は周作人自身の文学の定義に適う文学だったと言える。また先述のように「哀絃篇」は、第三節から第五節まで、ポーランド、ウクライナなど他国に支配されている民族の悲哀を詠う詩人、作家の作品を紹介している。つづく最終節の第六節でヘブライ文学として『旧約聖書』を取り上げているが、周作人は『旧約聖書』において亡国の悲哀を詠うエレミヤの姿を、哀音の詩を詠う東欧の詩人たちの姿に重なるものとして捉えていたと言えよう。先述のように周作人は「哀絃篇」において「エレミヤの哀歌」を第一節と最終節で取り上げており、「哀音」を詠う詩人像が、エレミヤに始まり東欧の詩人たちを経て、エレミヤに終わるように構成したと考えられる。そして、外国の「国民文学」を紹介することで中国人を感化しようと考えた周作人は、特に中国人の心を強く動かす「哀音」の文学として、『旧約聖書』の中から亡国の悲哀を詠った「エレミヤの哀歌」を取り上げて中心的に論じたと言えよう。ところで、周作人が「哀絃篇」において、『旧約聖書』から取り上げて評価を述べるのは「エレミヤの哀歌」を除けば「ソロモンの雅歌」のみである。艶やかで美しいと評価しながらも詳しく述べることのなかった「ソロモンの雅歌」について、周作人は十余年後に執筆した「聖書与中国文学」²²において詳しく論じているので、次節からは「聖書与中国文学」における『旧約聖書』の論じ方を見ていきたい。

20 文章者，人生思想之形現。（《周作人散文全集》第一卷 P96）

21 夫文章者，国民精神之所寄也。（《周作人散文全集》第一卷 P115）

22 『小説月報』12巻1号（1921年1月10日刊）所載。1920年11月執筆。

2、「聖書与中国文学」における「エレミヤの哀歌」

周作人は、「哀絃篇」の発表から十年余りたった1920年、「聖書与中国文学」を執筆し、『聖書』について論じるが『旧約聖書』について次のように述べている。

『新約聖書』と『旧約聖書』の内容は、ちょうど中国の四書五経と似ており、教義の上では经典であるが、一面では国民文学でもある。(中略)『聖書』の文学研究はヨーロッパではごく普通であり、イギリスの『万人叢書』(Everyman's Library)の『旧約聖書』は、『古代ヘブライ文学』と題されている。²³

周作人は『旧約聖書』をヘブライの国民文学であるとしており、先述のように日本留学中に発表した「論文章之意義」の「国民精神を託したもの」という文学観に適う文学作品として『旧約聖書』を捉えている点は「哀絃篇」と一致していると言える。周作人はつづけて、次のように述べる。

『旧約聖書』をヘブライの文学と言ったが、一面ではヘブライ人を宗教的な国民と認めない訳にもいかない。その文学の中には宗教的な要素が多く含まれていることは当然の事実である。しかし、文学と宗教の関係はもともと非常に密接であり、ヘブライ思想の中には宗教的な要素が他の国より少し多いというだけであると私は考える。²⁴

23 新旧約の内容、正と中国の四書五経相似、在教义上是经典、一面也是国民的文学；中国现在虽然还没有将经书作文学研究的专书，圣书之文学的研究在欧洲却很普通，英国《万人丛书》(Everyman's Library)里的一部《旧约》，便题作《古代希伯来文学》。(《周作人散文全集》第二卷 P298)

そして、周作人は、芸術の起源がもともと宗教儀式にあることを論証している。さらにはトルストイの『芸術とは何か』から引用して、芸術の目的がすべての人々を一つにすることであると述べた上で『旧約聖書』の解説に入っていく。ここで周作人は George Foot Moore “The literature of the Old Testament”²⁵ を引用しながら解説するため、同書と対照しながら周作人の解説の特徴、特に「エレミヤの哀歌」の扱い方について見ていきたい。周作人は先ず、同書第二章「国民文学としての旧約聖書」（“The Old Testament as a national literature”）から引用して次のように述べる。

彼（ムーア：筆者）は第二章で『旧約聖書』の国民文学としての価値について説明して、次のように述べている。「この『旧約聖書』はユダヤ及びキリスト教会における宗教的価値の外に、また、国民文学の残存でもあり、独立して研究する価値が極めて高い。（中略）その時代と文学全体における位置を明らかにしたならば、私たちはよりよく鑑賞し理解することができるだろう。ヘブライ人民の政治史、彼らの文明と宗教の歴史の素材もすべてこの文学の中にあるのである。²⁶

24 我们说《旧约》是希伯来的文学，但我们一面也承认希伯来人是宗教的国民，他的文学里多含宗教的气味，这是当然的事实。我想文学与宗教的关系本来很密切，不过希伯来思想里宗教分子比别国更多一点罢了。（同上第二卷 P298-299）

25 George Foot Moore “The literature of the Old Testament” (Oxford University Press, 1913年) 本稿は第二版（1948年）に拠った。

26 他在第二章里说明《旧约》当作国民文学的价值，曾说道，“这《旧约》在犹太及基督教会的宗教的价值之外，又便是国民文学的残余，尽有独立研究的价值。（中略）但如明了了他的时代与在全体文学中的位置，我们将更能赏鉴与理解他了。希伯来人民的政治史，他们文明及宗教史的资源，也都在这文学里面。”（同上 P301）ムーアの原文は次の通り。Apart from its religious value and authority for the synagogue and the Church, the Old Testament contains the remains of a national literature which richly rewards study for its own sake. (中略) they will be better appreciated as well as better understood in the light of their own times and in their place in the literature as a whole. In this literature are also the sources for the political history of the Hebrew people and for the history of its civilization and religion. (“The literature of the Old Testament” Oxford University Press, P23)

そして、ムーアの分類に従って「創世記」等を歴史書、「預言書」等を抒情詩、「ルツ記」、「エステル記」、「ヨナ書」を物語、そして「ヨブ記」をヘブライ文学最大の著作であり、世界文学における偉大な詩、ギリシアのアイスキュロスの作品のような悲劇作品であると述べる。ここで注意すべきは、周作人が「エレミヤの哀歌」を取り上げていないことである。先述のように周作人は、1908年に発表した「哀絃篇」において亡国の悲哀を詠った「エレミヤの哀歌」について、哀歌を詠う預言者エレミヤの姿に、東欧の詩人たちと同様に「哀音」を詠う詩人像を見ていた。そして、ヘブライの国民文学として『旧約聖書』を取り上げる際、「エレミヤの哀歌」を中心的に紹介していた。しかし、「聖書与中国文学」において「エレミヤの哀歌」について言及しているのはわずかに一か所である。周作人は、『新約聖書』と『旧約聖書』の関係を、中国の四書と五経の關係に似ているとした上で、『旧約聖書』と五経とを対照して次のように述べる。

『新約聖書』は四書、『旧約聖書』は五経、——『創世記』等の事件を記した書物は『書経』、『春秋』に、『レビ記』は『易経』と『礼記』の一部に、『申命記』は『書経』の一部に、『詩篇』、『哀歌』、『雅歌』は『詩経』にとても類似した部分がある。²⁷

周作人は「エレミヤの哀歌」を「ソロモンの雅歌」とともに『詩経』に類似するものとしている。しかし、「エレミヤの哀歌」についてはこれ以上言及することはなく、もっぱら「ソロモンの雅歌」を中心的に取り上げている。周作人が基づいたムーアの“The literature of the Old Testament”では第21章「詩

27 《新约》是《四书》，《旧约》是《五经》——《创世纪》等纪事书与《书经》《春秋》，《利未记》与《易经》及《礼记》的一部分，《申命记》与《书经》的一部分，《诗篇》《哀歌》《雅歌》与《诗经》，都很类似的地方；（《周作人散文全集》第二卷 P301）

篇、哀歌」（“Psalms, Lamentations”）で「エレミヤの哀歌」を解説している。12 ページある同章のわずか2 ページが「エレミヤの哀歌」についての解説である。ムーアは冒頭で次のように述べる。

紀元前 586 年のエルサレム陥落は、哀歌の書となっている、かなり長い五つの詩の主題である。預言者エレミヤがこの作者であるとする誤った見解は、キリスト教の聖書においてエレミヤ書のすぐ後ろに、この書が置かれていることに起因する。また序文は明らかにこれらの詩、あるいは最初の詩をこの預言者のものとしている。²⁸

ムーアは、「エレミヤの哀歌」の詩が預言者エレミヤの作ではないとし、エレミヤの作とされた原因が、キリスト教の『聖書』に収録される際に「エレミヤ書」のすぐ後ろに置かれたこと、また、付された序文が作者をエレミヤであるとしていることを挙げている。そして、ムーアは次のように結論する。

これらの詩は、すべてが同じ作者によるものではない。（エルサレムの：筆者）破滅の時期に最も近いと思われる詩（少なくとも第二歌と第四歌）は、おそらく破滅からそれほど経たない時に書かれているが、それ以外はおそらく更に後の時代であろう。これらの詩の中にエレミヤを作者であるという考えに我々を導くものは何もない。²⁹

28 The fall of Jerusalem in 586 B.C. is the subject of five poems of considerable length which together make the Book of Lamentations. The mistaken opinion that the prophet Jeremiah was the author caused this book to be put immediately after Jeremiah in the Christian Bible, with an introduction explicitly attributing the poems, or the first of them, to the prophet. (“The literature of the Old Testament” P202)

カトリックで用いられた七十人訳聖書（ラテン語）では、詩の作者がエレミヤであるとする序文が付されている。

つまり、ムーアの書に見られるように、『旧約聖書』研究の結果として、「エレミヤの哀歌」は預言者エレミヤの作ではなく、またすべての詩が同一作者のもでもないことが明らかにされていたのである。周作人が「哀絃篇」において共感を寄せた亡国の悲哀を詠うエレミヤの詩人像は、もはや再び取り上げるには、学術的な正当性を失ってしまっていたのである。

さらに注目されるのは、周作人が『哀歌』を『雅歌』とともに『詩経』に類似した性質のものと述べながら、「聖書与中国文学」の『旧約聖書』についての叙述で中心的に取り上げたのが、かつて「哀絃篇」で「艶やかに美しいのは世に稀」と述べるにとどめた「ソロモンの雅歌」であった点である。ムーアは「ソロモンの雅歌」を古代ヘブライの民謡として高く評価しているが、「エレミヤの哀歌」については民謡とは述べていない。周作人がムーアの評価を踏まえ、ムーアが民謡と断定した「ソロモンの雅歌」の方を論の中心に据えたと考えられるので、次節では、周作人の「聖書与中国文学」における「ソロモンの雅歌」についての論述を見ていきたい。

3、「聖書与中国文学」における「ソロモンの雅歌」

「聖書与中国文学」における『旧約聖書』の解説に見られる大きな特徴は「ソロモンの雅歌」を中心に上げている点である。『旧約聖書』についての叙述の約五分の四が「ソロモンの雅歌」に関するものである。周作人は、「ソロモンの雅歌」をヘブライの民謡であるとする議論と、「ソロモンの雅歌」についての文学的研究の方法が中国の『詩経』、特に「国風」の恋愛詩に対する研究法に重要な示唆を与えるものであるという議論の二点について述べている。周作人が基づいたムーアの“The literature of the Old Testament”は

29 The poems are not all by the same author. Those which seem to stand nearest to the catastrophe (ii and iv at least) were probably written no very long time after it; the others perhaps in the following generation. There is nothing in them that would lead us to think of Jeremiah as the author. (同上 P203)

222 頁ある著作である。第一章「旧約聖書の正典」³⁰、第二章「国民文学としての旧約聖書」、第三章「(モーセの) 五書」³¹、そして第四章以降は「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」、「民数記」、「申命記」、というように『旧約聖書』の内容を順に解説している。「ソロモンの雅歌」についての解説は最終章である第二十五章「伝道者の書、歌集の歌」(Ecclesiastes, Song of Songs) であり、六ページ中の三ページを占める。つまり、周作人が『旧約聖書』に収録された他の数多くの作品ではなく、ムーアの書でもそれほど紙幅を割いて論じられていない「ソロモンの雅歌」を中心に取り上げて論じていることが分かる。周作人は、ムーアの「ソロモンの雅歌」についての論述から引用して次のように述べる。

『雅歌』について彼（ムーア：筆者）は次のように述べている。「世俗の歌はおよそ当時、頌歌と同様に流行していたが、私たちはほとんどそのカタログを手に入れることができなくなってしまっただろう。もしも恋愛歌集にソロモンの名前が題としてつけられ、神秘的な解釈によって宗教の中に取り込まれて保存されることがなかったならば。³²

周作人は、古代ヘブライの恋愛詩が、ソロモン王の名が題となったことで現

30 The canon of the Old Testament

31 The Pentateuch

32 对于《雅歌》，他这样说，“世俗的歌大约在当时与颂歌同样的流行，但是我们几乎不能得到他的样本了，倘若没有一部恋爱歌集题了所罗门王的名字，因了神秘的解释，将他归入宗教，得以保存。”（《周作人散文全集》第二卷 P302）ムーアの原文は次の通り。Of secular poetry, which there is every reason to think flourished no less than hymnody, we should have had no specimens, had not an anthology of love songs somehow got the name of Solomon, and by a mystical interpretation been converted to religion. (“The literature of the Old Testament” P26) 当該部分は第2章「国民文学としての旧約聖書」(The Old Testament as a national literature) からの引用である。第25章における類似の叙述は次の通り。It was a fortune misunderstanding that has preserved them; but the accidental preservation of these few pages emphasizes the loss of almost every other vestige of Hebrew secular poetry. (“The literature of the Old Testament” (P222)

代まで保存されたことを評価し、つづけてムーアの書から次のように引用する。

この書の中で繰り返し述べられているのは一つのテーマである。すなわち男女間の熱烈な官能的恋愛である。……一世紀にはこの書はソロモンの名前が題となっていたが、厳正な宗派はこれを経典としていなかった。後に比喩としての意義づけが発見——もしくは付け加えられたという方が良いかもしれない——されてから、これは夫婦の愛情を借りて神とイスラエルとの関係を賛嘆して歌ったものと言われ、ようやく正典の中に収められたのである。(中略)比喩の恋愛詩——普通は神と靈魂の愛を述べる——は各種の教義や神秘派の中によく見られることである。極端にプラトニックな詩人は情欲及び合一の感覚の比喩をよく好んで使う。しかし、『雅歌』の中にはこのような起源は見出せず、その上何世紀もの間、私たちはユダヤにこのような恋愛派の神秘主義があったということも聞いたことがない。³³

「ソロモンの雅歌」は、イスラエルが栄えた時代の王であるソロモンの名を

33 这书中反复申说的一个题旨，是男女间的热烈的官能的恋爱。……在一世纪时，此书虽题着所罗门的名字，严正的宗派看起来不是圣经；后来等到他们发见——或者不如说加上——了一个譬喻的意义，说他是借了夫妇的爱情在那里咏叹神与以色列的关系，这才将他收到正经里去。(中略)譬喻的恋爱诗——普通说神与灵魂之爱——在各种教义与神秘派里并非少见的事；极端的精神诗人时常喜用情欲及会合之感觉的比喻，但在《雅歌》里看不出这样的起源，而且在那几世纪中，我们也不曾知道犹太有这样的恋爱派的神秘主义。(《周作人散文全集》第二卷 P302)ムーアの原文は次の通り。The one theme of the book, running through many variations, is the love of man and woman, passionate and sensuous. (中略) In the first century it was, in spite of Solomon's name, no Holy Scripture for the strictest sect, and was not finally admitted to the canon, we may be pretty sure, until an allegorical sense had been discovered in it, or rather imposed on it: it sang, under the figure of wedded love, of the relation of the Lord to Israel. (中略) Allegorical love poetry — usually the love of God and the soul — is not uncommon in mystical sects or circles of various creeds; and the ultra-spiritual poets often revel in an ultra-sensual imagery of passion and fruition; but nothing in the Song of Songs suggests such an origin, nor have we knowledge of a Jewish mysticism of this erotic type in the centuries from which it must come. ("The literature of the Old Testament" P220-221)

題としていながらも、内容が官能的な恋愛詩であるためになかなかユダヤ教の正典に入れられなかった。時代を経て、男女間の愛の関係を、神とイスラエルの民との関係の比喻とする解釈が生まれることで、ようやく正典の一つとして『旧約聖書』に収められたというのである。そして、周作人はムーアの結論を次のように引用する。

これらの歌は民間歌謡の良い例であり、伝統的な題材と形式およびイメージを備えている。この歌は当然一個人の著作ではなく、一つの恋愛歌集に違いないと信じてよい。必ずしもみな婚礼の宴会のために作られたものではないが、いずれもこうした場面で使われるのに適したものである。³⁴

周作人は、ムーアの解釈に基づいて「ソロモンの雅歌」をヘブライの民間歌謡であり、祝婚歌であるとした上で、さらに次のように解説を続ける。

この『雅歌』の性質は、まさにギリシアの祝婚歌（Epithalamia）の類に近い。トルストイの厳正な批評によると宗教的芸術とはされないが、普遍的芸術として恥じないものである。³⁵

周作人は「ソロモンの雅歌」を古代ギリシアの民間歌謡である祝婚歌に近い

34 那些歌是民间歌谣的好例，带着传统的题材、形式及想象。这歌自然不是一个人的著作，我们相信是一部恋爱歌集，不必都是为嫁娶的宴会而作，但都适用于这样的情景。（《周作人散文全集》第二卷 P302）ムーアの原文は次の通り。The songs are fine examples of popular poetry, with traditional subjects, forms, and imagery. Nothing requires us to suppose that they are the production of one poet; we may think of them rather as an anthology of love songs, not necessarily all composed for wedding festivities, but all appropriate for use on such occasions. (“The literature of the Old Testament” P222)

35 这《雅歌》的性质正与希腊的催妆诗（Epithalamia）之类相近，在托尔斯泰派的严正批评里，即使算不到宗教的艺术，也不愧为普遍的艺术了。（《周作人散文全集》第二卷 P302-303）

性質のものであるとし、普遍的芸術として高く評価している。そしてさらに、中国の『詩経』の「国風」における恋愛詩との比較に論を進める。³⁶「国風」の恋愛詩は、儒教道徳を表現する比喩の詩であると伝統的に解釈され、そのため西洋における聖書研究のような学術的研究が行えないと指摘する。周作人は、例として「国風」の「閔睡」（「周南」）と「女曰鷄鳴」（「鄭風」）を挙げ、この二首には比喩による諷刺の要素はなく恋愛詩であると述べ、歴史的な視点から国民文学として『詩経』を研究することで、必ず成果が得られるはずだとしている。

ところで、「聖書与中国文学」において周作人は、「ソロモンの雅歌」を中心に取り上げているが、「ソロモンの雅歌」は「哀絃篇」において中心的に扱った「エレミヤの哀歌」とは内容的に明らかに異なる性格のものである。先述のように「エレミヤの哀歌」はエルサレムの破滅を嘆く歌であるのに対し、「ソロモンの雅歌」は恋愛詩である。次に一例を挙げる。

あなたは私をあなたの心の上に印のように置いてください。あなたの腕の上に判のように付けてください。愛情は死のように強固で、嫉妬はあの世のように残忍だからです。放たれた電光は、炎のような電光、ヤハウエの激しい炎。愛情はたくさんの水で消すことはできず、大水でも沈ませることができない。³⁷

周作人は、「ソロモンの雅歌」を民間の恋愛詩として評価しているが、ここ

36 ソロモンの名によってヘブライの民間歌謡の恋愛詩が保存されたが、「国風」における民間歌謡の恋愛詩も、孔子が編纂したという理由によって儒教の経典として保存されたものである。「ソロモンの雅歌」と「国風」の恋愛詩が、現代まで保存された理由も類似していると言える。

37 求你将我放在你心上如印记，帶在你臂上如戳记，因为爱情如死之坚强，嫉恨如阴间之残忍。所发出的电光，是火焰的电光，是耶和华的烈焰。爱情，众水不能息灭，大水也不能没。（歌第八章六至七节）（《周作人散文全集》第二卷P417）周作人は「欧州古代文学上の婦女観」（1921年）においてこの部分を引用している。

には「哀絃篇」で取り上げた、「哀音」を詠う詩人の姿は全く見られない。「哀絃篇」では文学の普遍性を主張することに力点を置き、外国文学を中国に紹介することで中国人を感化し得ることを論証し、特に「哀音」を詠った文学が最も強い感化力を持つとした。それ故に「哀音」を詠った「エレミヤの哀歌」を取り上げたのであった。十余年を経て書いた「聖書与中国文学」では、喜びよりも悲しみを詠った文学の方が人の心に強く訴えかけるという「哀絃篇」での主張は影を潜め、「哀音」を詠うエレミヤの姿もない。『旧約聖書』の取り上げ方に見られる差異、「哀音」を詠う詩人の文学である「エレミヤの哀歌」と、民間歌謡の恋愛詩である「ソロモンの雅歌」との差異は、日本留学時期と1920年という時点における周作人の「国民精神」、「国民文学」に対する捉え方に幾分かの差異が存在することを示していると言えよう。

結びに代えて

周作人は、「聖書与中国文学」において、「ソロモンの雅歌」の研究が『詩経』『国風』研究の参考となることを述べた後、ヨーロッパ文学・文化の源泉としてのヘレニズムとヘブライズムに関し次のように述べる。

近代ヨーロッパ文明の源泉は周知のように「二つの希（希臘と希伯来：筆者）」に始まっている。すなわちギリシアとヘブライの思想である。実際のところは一つのものの両面に他ならないが、一般には「人間の本質の二元」と呼ばれ、対立するものとされる。この区別は、すなわちギリシア思想は肉的、ヘブライ思想は霊的、ギリシアは現世的、ヘブライは永生的とされる。ギリシアは人の肉体を最も美しいものとし、それ故に神と人とを同じ形、また同じく生活をするものとし、神はすなわち完全にすべてが備わった人であり、神の性質とはすなわち理想的に充実した人生であった。ヘブライは、人は神の姿をかたどって作られたものと考え、それ故に

人類に分かち与えられた神の性質を重んじ、拡充しようとすることで、神に近づき一つとなろうとする。この二つの思想は当初は分立していたが、互いにおつかり合うことで近代文明が形成され、現代に至ってようやく融合の現象が起こった。³⁸

この叙述は二年前の1918年に、北京大学での自己の講義録を編集して上梓した『欧州文学史』における叙述³⁹とほぼ一致している。すでに指摘があるように当該箇所は、厨川白村の『文芸思潮論』を踏まえて述べられている⁴⁰。しかし、周作人は「聖書与中国文学」においてギリシア思想の肉的要素とヘブライ思想の靈的要素は「実際のところは一つのもの両面に他ならない」としており、さらに『欧州文学史』と異なり、次のような叙述を続けている。

実際のところ、ギリシアの現世主義の中には中庸（Sophrosyne）を重んじるところもあり、ヘブライにも熱烈な恋愛詩がある。私たちが言う両派の名称はその特殊な一面を代表するものに過ぎず、決して本当に完全に隔絶したものではない。⁴¹

ヘブライの「熱烈な恋愛詩」は「ソロモンの雅歌」を指すが、周作人が翌1921年に発表した「欧州古代文学上の婦女観」にも類似した叙述がある。『旧

38 近代欧洲文明的源泉，大家都知道是起于“二希”就是希腊及希伯来的思想，实在只是一物的两面，但普通称作“人性的二元”，将他对立起来；这个区别，便是希腊思想是肉的，希伯来思想是灵的；希腊是现世的，希伯来是永生的。希腊以人体为最美，所以神人同形，又同生活，神便是完全具足的人，神性便是理想的充实的人生。希伯来以为人是照着上帝的形像造成，所以偏重人类所分得的神性，要将他扩充起来，与神接近以至合一。这两种思想当初分立，互相撑拒，造成近代的文明，到得现代渐有融合的现象。（《周作人散文全集》第二卷 P303-304）

39 『欧州文学史』（上海商務印書館、1918年）第一卷「希臘」第十章「結論」二十四「希臘思想」。

40 梁敏儿《厨川白村与中国现代文学里的神秘主义》（《中国文学报》第56册1998年4月）、拙稿「周作人とルネサンス」（慶應義塾大学日吉紀要『中国研究』第4号、2011年3月）。

41 其实希腊的现世主义里仍重中和（Sophrosyne），希伯来也有热烈的恋爱诗，我们所说两派的名称，不过各代表其特殊的一面，并非真是完全隔绝，（《周作人散文全集》第二卷 P304）

約聖書』を取り上げて古代ヨーロッパの女性像を論じた部分で、周作人は「ソロモンの雅歌」を取り上げる。「ソロモンの雅歌」を婚礼の際に詠われた抒情歌集とし、ソロモンとは新郎の一種の美称に過ぎないとするムーアの説を支持する。そして、「ソロモンの雅歌」第八歌から二節引用した上で次のように述べる。

私たちはこの歌を読むと、禁欲思想のヘブライ文学の中にもこのような熱烈な恋愛詩があることがとても奇異に思われる。しかし、これによって一つの教訓を得ることもできる。人間の本性の中には霊と肉とがもともと併存しており、片方をおろそかにして良いものではないのだ。⁴²

ヘレニズムとヘブライズムというヨーロッパ文化の二大潮流を語る際にヘブライ思想に欠くことのできない要素として「ソロモンの雅歌」は取り上げられている。ヘブライの民間歌謡であり「国民文学」である「ソロモンの雅歌」は、周作人が『旧約聖書』、さらには西洋文化の源泉の一つであるヘブライズムを考える上でも重要な位置を占めていたと言えよう。また、周作人は、日本留学中、「国民精神」の現れである「国民文学」としての側面、「国民精神」を詠う詩人像の側面を重視して『旧約聖書』から「エレミヤの哀歌」を取り上げて論じた。1920年には、「国民精神」の現れとしての「国民文学」である民間歌謡を重視する立場で、『旧約聖書』から「ソロモンの雅歌」を取り上げて論じていた。「国民精神」の現れである「国民文学」を重視する姿勢は一貫しつつも、表現内容を「哀音」に限定することはなくなり、「国民精神」を表現して「哀音」の「国民文学」を生み出す詩人像自体を強調する姿勢も影を潜めていると言え

42 我们看了这歌，觉得在禁欲思想的希伯来文学中，也有这样热烈的恋爱诗，仿佛很是奇异；但因此也可以得到一个教训，知道人性里灵肉二元并存，并不是可以偏废的了。（《周作人散文全集》第二卷P417）

る。日本留学時期と五四時期における周作人の「国民精神」、「国民文学」に対する捉え方の差異がいかなるものであるのか、また、周作人が『旧約聖書』の中で「エレミヤの哀歌」と「ソロモンの雅歌」に注目した理由についても更なる検討が必要なため今後の課題としたい。⁴³

43 子安加余子『近代中国における民俗学の系譜—国民・民衆・知識人—』（御茶の水書房、2008年11月）によると、北京大学に赴任後の1918年に北京大学で歌謡徴収処が設置されて歌謡の収集が開始されると、周作人は中心人物の一人として活動する。そして、1920年には自らが中心となって北京大学に歌謡研究会を発足させ、1922年には機関誌『歌謡』も創刊している。「聖書与中国文学」を執筆した1920年は、正に周作人が、「国民精神」の現れである歌謡から「国民文学」を生み出そうと、歌謡収集に力を入れていた時期でもあった。こうした歌謡収集の取り組みと、ヘブライの民間歌謡である「ソロモンの雅歌」への関心との関係についても今後検討したい。